令和４年度第１回大阪府日本万国博覧会記念公園運営審議会概要

〇日　　時：令和４年５月９日（月）10時00分～11時30分

〇場　　所：大阪府咲洲庁舎（さきしまコスモタワー）23階　中会議室

〇出席委員：国枝会長、相原委員（リモート）、阿多委員、清水委員、玉置委員、南雲委員、

三木委員、山田委員

〇事務局　：府民文化部副理事、万博公園事務所　ほか

Ⅰ　開会

Ⅱ　議題

**○議題　大阪府日本万国博覧会記念公園の現況**

（資料に基づいて事務局から説明）

**○議題　新たなビジョンの答申骨子（案）について**

（資料に基づいて事務局から説明）

（国枝会長）ただいまのランドスケープデザインの検証・再定義案及び万博公園の存在意義をもとに、議論を深めていきたい。まずは検証・再定義についてご意見をお願いする。

（玉置委員）過去の経緯を踏まえてしっかりした検証をしていただいた。

再定義は絶対に必要だと思う。これまで漠然としていたものを、大きく変化しつつある状況の中で、定義しなおす必要があるということで、今回の会議の意見を踏まえながら、新しいゾーニングを大阪府で定義してもらった。たたき台としては良いと思う。

公園の歴史について、高山栄華氏は近代都市計画の父のような人物。EXPO’70が終わった後、彼は1970年代の思想をもとにコンセプトを決め、公園を作った。その後、その在り方自体を考え直すことがないままに2020年まで来たというのが現状だと思う。1970年代と今では当然、違う問題意識がある。当時は公害が非常に大きな問題であったけれど、今や日本は森林が増えている状態で、世界でもまれに見る森林率が高い国である。高度経済成長期と今では、時代環境が全然違うので、そういう意味で、再定義というのは非常に重要だと思う。

現在、指定管理など、手を入れながら変わってきた部分もあり、それに沿って、レガシーゾーンやアクティブゾーンなどを示したことは非常に良いことと思う。そのうえで、高山栄華氏が定義した公園のコンセプトと、今回再定義したゾーニングのコンセプトの違いを示す必要がある。現状に即したゾーンで、ある程度納得できると思うが、そういうゾーンで何がしたいのかは避けては通れないもの。今後、大阪府の公園として、万博記念公園をどうしていくのかの再定義、むしろ、コンセプトの定義が必要になってくると改めて感じた。

（三木委員）事務局からの説明を補足すると、70年万博基本計画が丹下健三氏を中心として作られて、跡地計画が考えられないまま終わってしまった。跡地計画に関しては3年くらいで作っている。中心となったのは高山栄華氏。東京大学都市工学科の最初の教授で、丹下健三氏の先輩にあたるが、丹下氏とはやや対立的な概念の持ち主であった。高山氏は現実主義で、戦後に都市計画をして、さらに公害問題などの計画にも取り組んだので、そのときの思想が大きく反映されている。丹下氏が考えた南北軸の幹に見立てたシンボルゾーン、そこから枝に見立てた道が分岐し、華に見立てたパビリオンが立っているという構図の未来都市のイメージを消す、南北の軸を東西の軸に変えて、区画を消し森に還す、そういうものがこれから必要だと考えた。目指したのは鎮守の森のようなもので、近代でいうと明治神宮のように手を入れずに自生していくものを、30年間で目指していくと計画した。すり鉢状の公園の端から中心にかけて、鎮守の森、里山、芝生のように段階をつけて、中央部分でみんなが集まれるゾーニングを考えた。ただ、お祭り広場や太陽の塔はみんなの思い入れが強く、残っている。

今あるものは、丹下健三氏が考えた初期の基本計画、高山栄華氏が計画した跡地の基本計画、みんなの思いがあって残ったものという3層くらいの構造になっている。それを今からリ・デザインするが、プラスアルファとして、これからどう考えるかというビジョンが必要。レガシーゾーンが、皆の思いがあって70年万博から残った部分、その他は上から塗られた部分など。現在、気候変動の問題が大きくなり、地球環境の持続可能性が叫ばれているので、森の再生は高山栄華氏が考えていた当時とは少し違ったフェーズで見直されているので、それも含めて改めて考え直す。

高山栄華氏の万博記念公園への関わりはほとんど知られていない。高山栄華氏の基本計画は流通していないので、何故森になっているのかがわからない。70年万博というよりも、むしろ70年代の高山氏の思想が反映されている　のが万博記念公園の実態だと思う。

その上で、レガシーゾーンが中心になると思うが、プラスアルファでお祭り広場やテクノロジーの部分をどこに反映させていくのか、具体的な場所に収めなくてもDXのように外からアクセスしやすいとか、広告の仕方とか、見えない形でもテクノロジーを活用していくという話になるのかなと思う。レガシーゾーンという形で過去の70年万博からの思想を基盤として太陽の塔を含めるのは良いと思うし、現状のゾーニングに関して、後で再認したような形にはなるが、この形で問題ないと思う。

（山田委員）最初の基本計画では、単体の公園というより公園とまちが一体となったエリアを作る計画であるように見える。だから、学術センターや芸術センター、あるいは管理サービス中枢地区がある。管理サービス中枢地区はまちとしての機能を発揮するための機能が入っているように見える。そう考えると、今のエキスポシティはスポーツゾーンというよりは管理サービスゾーンに属するものではないか。これから計画するアリーナなども当初案である管理サービス中枢地区の理念を提唱していた地域と考えられ、まちと公園が一体となったエリアの一部として、当初の案からなんら不整合はないと思う。

おそらく、普通の人が考える公園ではなくて、公園を含む都市計画、街区計画として全体を考えていくと良いと思う。今の公園エリアは、真ん中の部分は公園だが、周りにあるスポーツエリアなどはもう少し幅広く公園プラスまちの構成のパーツである。その中にまた新しいものが入っていくと考えてはどうか。要するに、都市公園と同じと考えない方が良いということ。実際、万博公園は条例設置公園という特殊な公園であり、その特殊な所以というのがこういったものであるため、その特性を活かした新たなプランを作れればいいと思う。

（事務局）3名の委員のご意見は、今あるものをどう理念化し、次につなげていくのかということ。公園のランドスケープデザインの検証作業を行いながら、どうしても地域開発としての70年万博と、緑に包まれた文化公園である万博公園の対極的なところに目が行ってしまっていたが、もともと万博公園は、都市公園とまちが一体となったエリアとして計画されていたように見えるという山田委員のご指摘はなるほどと思った。

（阿多委員）資料3の23p、再定義の結果について、これがどういうコンセプトに基づいて作られたのかという理屈だてが必要であると思う。同14pに陰陽・静動とあるが、これは結局、以前の外宮の考え方、南北と東西の4区画の組み合わせになっている。23pを見るといろいろなゾーニング案があるが、色々な人が活動する場というのが公園を取り巻くように変わっていると考えると、14ページの時は縦と横、東西南北で切っていたのが、23ページになると、レガシーを中心に同心円状に広がっているように見える。ならば、公園の中心となるところのまわりで社会的な活動、都市活動が行われて、その中でみんな自然に帰る、自然と真ん中に集まってくるという考え方もできる。そういう意味では東西南北の軸の定義よりも、太陽の塔などのレガシーを中心に、円のように広がっていく切り方でも良いのではないかと思った。

（清水委員）どういう経緯で残されることになったのかなどを聞いて、重みのある話で大事にしていかなければならない場所だと再認識した。70年当時の地図は初めて見たが、これを見ると日本庭園以外は緑がすべてなくなっている。今の地図を見ると、緑がたくさん残っており、当時の委員の意見が反映されたことが感慨深い。これだけの緑があるということは、公園にとっても地域の人にとっても非常に価値のあることで、委員の貢献に感謝したい。

50年経って、色々なことを考え直さなければならない時期になっている。ずっとそのままで維持できていたのはすばらしいことだが、今回再定義をすることは重要である。

資料3の24pについて、Ⅰをみると、ここに70年万博の考え、目的、目指すべきところが盛り込まれており、レガシーを受け継いでいくという文脈の中にテクノロジーを付け加えることで、新たな概念が生まれている。

Ⅱ，Ⅲについては現状の問題、持続可能な社会に向けた問題にフォーカスし、当時よりも今は人の動き、コミュニケーション、安心の問題に目が向けられていると思う。人がつながるということを審議会でずっと言ってきたが、そこが強調されていると思う。24ページに関しては、うまく3つにまとめられていると感じる。

ひとつ気になるのが、万博公園の場所について。なぜこの場所が選ばれて70年万博が行われたのか分かっていない。もともと竹林だったものが拓かれて会場となったということだが、もとは人が住んでいたのか、竹林としてどのように活用されていたのかがわからない。ここを残していくにあたって、万博があったという事実とそういう概念を越えた、もともとの地域としての場が見えてこないのが前から気になっていた。万博公園になる前の、昔からあった竹林がどう使われていたのか、どんな生物がいたのかなど見えるものがあれば、万博公園がこの地域にある意義が浮かび上がってくるのではないか。ランドスケープを考えるのであれば、もともとの地域の土地の力というもの考慮できればと思う。

（国枝会長）海外の文献にもセンス・オブ・プレイスというものがあったが、どうか。

（三木委員）千里丘陵自体はもともと竹林が多かったらしいが、それは江戸時代の新田開発ぐらいからの話で、もともとため池が多く、水はけが悪く、水が潤沢ではないため田んぼが作りにくかった。そのため、竹くらいしか育てられず、後から小作人たちが竹を植え、千里丘陵全体に広がったそうだ。このあたりに何故万博が来たかは、大阪の市街地から近く、戦後の千里ニュータウン開発のときに残った土地でもあった。そこで、千里の地域開発と連動して万博で活性化させようというのが基本的な計画であったと思う。昔の痕跡について、千里ニュータウンの真ん中あたりに神社などが残っているが、昔のものが残っているところは少ない。万博記念公園から近いところに伊射奈岐神社があり、万博の造成やパビリオンの建設時は、神主が地鎮祭をしたり、開会式でお神輿を出したりしていた。また、近くには圓照寺があり、万博記念公園一帯は、もともと天台宗の円仁が開山した圓照寺の敷地内であったという話もある。広大な寺院は室町時代に応仁の乱で焼けてしまったが、太陽の塔のある場所には千手観音があったという話がある。今も残る圓照寺はその一部だったようだ。どこまで遡るかという話になるが、竹林の歴史と言われると江戸時代になるし、室町時代には全体が寺院だったという話になる。近くを散策するとそういう痕跡もわかる。

（南雲委員）当時は山田村であり、竹林を栽培してタケノコを掘って、缶詰を作り販売していた歴史もある。万博や、ニュータウン開発の時に田畑を売った。また、昔から万博丘陵は須恵器の窯があった。万博のために土地を広げるときに窯が出てきたという話もある。この辺りは茨木の方へ川が流れる小高い丘になっており、ため池が多く、昔は兎を獲る為に山に入ったこともあると聞いた。

レガシーということで、万博公園が今まであらゆる意図で作られたということを大事にしながら、今の人間の将来に向けての思いが表れてくれたらいいと思っている。古いところでも、旧児童文学館が府の倉庫になっていたりするので、もっと有効に、無駄なく使われることを願っている。

（相原委員）ゾーニングで昔のことが知れたのが一番の発見。資料2で新しいコンセプトが見えてきており、議論を踏まえた多様性などに対応してきているのかなと思う。

（玉置委員）清水委員の発言に関連することとして、昨年、元トリップアドバイザーの牧野氏などと一緒に一般社団法人メタ観光推進機構を立ち上げた。メタ観光はGPS上の位置情報に色々なレイヤーが重なっている。分かりやすい例でいえば、ブラタモリやポケモンGO。同じ場所だが、タモリさんが歩いているとかつて地殻変動があったとか明治維新以降はこんな近代産業があったなどさまざまな情報が重なっている。

万博公園という極めて強烈なものがあるとそれに一元化されがちだが、清水委員や三木委員が仰ったように、実際には昔からの歴史がある。そういう重なりを楽しむというのが、これからの新しい観光の在り方だと思っており、万博公園はおもしろい可能性を秘めていると思う。

EXPO’70の会場図は見ているだけで懐かしい。今、バーチャル万博に大阪府市も日本政府も力を入れている。今なら万博公園の上にかつての万博のバーチャルパークをデータで乗せることは可能。お金はかかるが、KDDIなどが行っていて、面白いと思う。今はただの芝生になっているところにパビリオンがあったということが見られると面白いと思う。各委員からの意見は非常に示唆に富んでいて、これからの新しい観光の形として再定義の中に活きてくるのではないかと思う。

混ぜ返すような議論になるが、そもそも公園とは何なのかという話がある。いわゆるパブリックパークを訳したもので、公園という言葉自体は北宋くらいに出てくる言葉。では、公園とは何のためにあるのか。

こどもの日に、僕が幹事をしている東京文化資源会議で、会長である東大の吉見俊哉氏たちと上野公園について話し合った。上野公園は明治以降、国内で3番目に指定された公園だと記憶している。もとは寛永寺の境内で、上野戦争のあと、どうするかというときにボードウィンが公園にするのはどうかと言ったことで公園になり、その流れのまま今の上野恩賜公園になった。なので、一度もグランドデザインがひかれたことがない。唯一、国立西洋美術館が建てられるときに、ル・コルビジェがいくつかの複合施設と連携した公園構想を作ったが、国立西洋美術館だけが作られ、実現されなかった。国立西洋美術館が数年前にリニューアルした際に、植え込みがあった前庭を、コルビジェが当時デザインしたものに再生し、当時の形に戻した。国立西洋美術館は、前川國男氏や坂倉準三氏、吉阪隆正氏といったコルビジェの弟子3人が作った。国立西洋美術館の前にある東京文化会館は前川國男氏が設計したもので、部分的にコルビジェのしようとしたことが実現している。

みんな公園は良いと思っているけれども、公園がそもそも何のためにあるのかというのは、大きな問題だと思う。

そういう意味で、PMO[[1]](#footnote-2)が浸透するのは非常に大きくて、日本で一番の成功例はてんしばと大阪城公園と言われている。最近だと豊島区の南池袋公園など、新しい公園のあり方みたいなものの議論が非常に高まりつつある。このタイミングで万博記念公園を再定義するのであれば、公園は何のためにあるのか、パークマネジメントをどうするのかというところまで入れたい。

それから、万博のレガシーはEXPO’70のころから持ち越されてきた課題である。愛・地球博はジブリになったが、そもそも万博をした跡をどうするのか、もう一度ここで示すことは意義があると思う。

（三木委員）跡地利用に、レガシーをどうするかは書いていない。太陽の塔は壊すという話があったが、公式記録にはそのほかの資料をどうするか位置付けられていない。そのため、資料が万博記念協会の倉庫に30年放置されていた実態がある。なぜかというと、公園にするというのは土地の話だけで、万博が終わった時にデータや資料の使い方は全く考えていなかったからだと思う。今回、レガシーを正確に位置づけるにあたって、膨大な資料をどうするべきかを位置付けたいと考えている。

玉置委員も関わられていた寺田倉庫（天王洲アイル）で行われた万博50周年記念展覧会では、たくさんの資料を展示し、著名な現代音楽の作曲家一柳慧氏などの音源が公開されていたが、非常に多くの資料がまだ埋まったまま、整理はされているけれども保存処理はされておらず、公開のプロセスもない。今やらなければ、25年万博が終われば絶対に忘れられてしまう。レガシーに、物質だけでなくデータ、資料の部分も公開できるようなプロセスができないかと思っている。最近、バシェ協会から相談があったが、京都市立芸術大学と東京芸大でバシェの音響彫刻を修復・保管しており、来年、京都市立芸術大学が移転するので一部を返却したいが、大阪府できちんと保存されるかを心配している。また、これらは楽器なので活用されないと意味がない。そういう体制が大阪府で取れるのかどうかという懸念も聞いている。本当に貴重な資料なので、モントリオール博ではきちんとアーカイブを残しているという。こういう機会に、かつてないマルチメディアの万博アーカイブを公開できるプロセスを作りたいと思っている。マルチメディアには様々な形態があるので保存が難しく、日本ではスペシャリストが少ないが、専門の委員を置くべきものである。専門の委員が置けなくとも連携するなどしてほしい。建築、現代美術、現代音楽、デザインなど様々な分野で大阪万博は世界的に重要な位置づけにあり、公園に来なくても見られるようなアーカイブなどの形にしてほしいと思っている。

公園問題について、明治以降に公園になった場所の多くは寺社。なぜかというと廃仏毀釈などがあり、その境内を改造したから。京都の円山公園もそうだと思う。万博公園に関しては、お祭り広場をつくるにあたり、上田篤氏が小豆島の神社の境内に、西洋の広場と日本の祭りの融合に見出したという経緯がある。

また、跡地利用に関しては、自生する森ということで鎮守の森、日本の生態系を守る鎮守の森や、里山、境内がコアに入っている。そういう日本的な思想も入れ込んでいくと良いと思う。

（国枝会長）様々なご意見頂戴した。再定義については肯定的なご意見をいただいた。また、存在意義についても特に反対意見はなかったと確認している。

一方で、公園とは何か。また、今ご指摘いただいた膨大なアーカイブ、レガシーの活用について新たにご意見をいただいた。本日の議論について、事務局で改めて集約し、整理したうえで、答申素案として示してもらいたい。

Ⅲ　閉会

（次回審議会予定について、事務局から連絡）

以上

1. ＰＭＯ（Ｐark Ｍanagement Ｏrganization）：民間事業者が主体となって新たな魅力を創出する事業を展開し、公園を総合的かつ戦略的に一体管理する事業 [↑](#footnote-ref-2)